

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：14301
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009 ～ 2011
 課題番号：21520136
 研究課題名（和文） 第一次大戦期ドイツにおける「音楽と社会」ならびに 1920 年代へのその影響
 研究課題名（英文） Music and society in Germany during the First World War and its impact on the 1920s
 研究代表者
 岡田 暁生（OKADA AKEO）
 京都大学・人文科学研究所・准教授
 研究者番号：70243136

研究成果の概要（和文）：本研究においては、戦争中の作曲家ならびに批評家の言説の中に、後の一九二〇年代の新潮流へとつながっていくような新理念の萌芽を見出し、さらには戦争の諸相との具体的な因果関係を見出すことを目的とした。研究の結果として、当時の有名な批評家パウル・ベッカー（Paul Bekker）が、戦争中の一九一六年に出版された *Das deutsche Musikleben*（ドイツの音楽生活）において、従来の演奏会制度が専らブルジョワ階級の独占物にすぎず、それは歴史的使命を終えつつあって、戦争が終わった後は全階級に開かれた新しい音楽演奏の機関を創出しなければならないと考えていたこと、ベッカーが夢見る新しい演奏会は、一種宗教的なものであって、ここにワーグナーの総合芸術の理念の幾分アナクロニスティックな残響が存在していることを、明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to find out the roots of the music aesthetics on the 1920s in the discourses of composers and music critics during the first world war. The focus of this research is the historical relationship between the war and the music culture on the 1920s. As example I have researched the music aesthetics of Paul Bekker, especially “Das deutsche Musikleben”, which is published in 1916. According to Bekker the concertmusic has already done its historical role and after the war a new music culture should be created.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
22 年度	800,000	240,000	1,040,000
23 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学／芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学、戦争、文化

1. 研究開始当初の背景

文学や絵画におけるのと同様、第一次世界大戦は音楽史にも甚大な影響を与えた。それは西洋音楽史における最も大きな亀裂であるといっても過言ではなく、その「前」と「後」

では歴史の風景がまるで変わったといってもいい。ソ連音楽の誕生、十二音技法の成立、ジャズの影響、新古典主義の流行など、大戦後に生まれてきた新しい音楽史潮流は枚挙に暇がないが、とりわけ重要なのは、従来の

演奏会制度に支えられた自律美学の崩壊と、それに伴う演奏会音楽ジャンル（とりわけ交響曲）の衰退である。 Hindemithらの機能音楽の誕生、ロマン派時代の自律美学（およびその延長として彼らが考えたシェーンベルクの新音楽）に対するアイスラーやクシエネクの批判的距離、ロマン派の自律美学のもとで生まれた「傾聴」型の音楽聴に対して「社交」型のそれを対置したハインリッヒ・ベッセラーの音楽美学などはすべて、第一次世界大戦後における伝統的な演奏会制度への疑問から生じてきたものである。

これら一九二〇年代ドイツの新しい音楽潮流については、作曲家論としても様式論としても美学論としても、フランクフルトの Hindemith 研究所が定期的に刊行している *Hindemith-Jahrbuch* をはじめとして、既におびただしい研究の蓄積がある。しかしながら、従来の一九二〇年代音楽の研究に欠落しているものは、この時代の音楽潮流を、「それに先立つ時代」との歴史的デュナーミクの中で捉えようとする視点である。これまでの音楽史記述に大なり小なり見られる偏向は、次の二点である。

1：一九一四～一九一八年の世界大戦期を、暗黙のうちに「音楽史の空白の時代」として括弧に入れる傾向。どの作曲家も、戦時下にあったこの時期には創作活動は鈍るが、それでも、一方ではリヒャルト・シュトラウスが《影のない女》を構想し、他方でシェーンベルクが《ヤコブの梯子》において後の十二音技法の着想の原点となるような実験を始めるなど、最終的には戦争が終わってから世に出ることになるが、実は第一次世界大戦の最中に生まれていた音楽史上の出来事は多い。

2：「政治的社会的にあれだけの激動があったのだから、音楽史に大きな変化があるのは当然だ」という暗黙のロジックによって、一九二〇年代における音楽史風景の激変を一種自明のように見なし、世界大戦との因果関係をそれ以上掘り込んで探求することを怠る傾向。重要なことは、この変化が大戦と直接の因果関係があったのか、あったとすればそれはどういうものであったのか、或いはそれは単なるゆるやかな並行現象にすぎず、音楽史の変化は政治史および社会史のそれからある程度独立したものと見なされるべきなのか、といった問いである。

従来音楽史記述においてはおしなべて、「世界大戦の『前』と『後』で音楽史が劇的に変わった、それは恐らく大戦の影響であったらう」という以上には、あまり議論が前へ進まなかったとすれば、その根本的な理由は上の二点にあると考えられる。

それに対して本研究において何より重視するのは、第一次世界大戦の「前」（例えばシュトラウスの《バラの騎士》やマーラーの

晩年の交響曲）と「最中」（色々な作曲家の実際の戦争体験なども含む）と「後」（Hindemithやアイスラーやクシエネクの若い世代の台頭）とを、互いに反発しあうような様々な動きを孕みつつ進んでいく、「連続的な面」として捉える視点である。

2. 研究の目的

戦争中の作曲家ならびに批評家の言説の中に、後の一九二〇年代の新潮流へとつながっていくような新理念の萌芽を見出し、さらには戦争の諸相とのその具体的な因果関係を見出す。例えば有名な批評家 Paul Bekker は、戦争中の一九一六年に出版された *Das deutsche Musikleben*（ドイツの音楽生活）において、従来の演奏会制度が専らブルジョワ階級の独占物にすぎず、それは歴史的使命を終えつつあって、戦争が終わった後は全階級に開かれた新しい音楽演奏の機関を創出しなければならない旨を述べている。Bekker が夢見る新しい演奏会は、一種宗教的なものであって、ここにワーグナーの総合芸術の理念の幾分アナクロニスティックな残響を聞き取ることは難しくはない。しかし同時にここでは、明らかに従来の自律美学に基づく演奏会制度と受身に傾聴するのみの聴衆という、戦後アイスラーや Hindemith やベッセラーが問題にすることになるロマン派／ブルジョワ文化批判が予告されている。一九二〇年代にまず音楽批評家として活動を始めたアドルノにも、こうした発言がしばしば見られる。この種の言説のルーツを大戦中に出版された音楽書や音楽雑誌から析出し、それらを分析することが、本研究の第一の目的である。

3. 研究の方法

第一次世界大戦以前（1910～1913）および大戦勃発後（1914～1918）のドイツにおけるオーケストラ演奏会のプログラム調査。対象とするのはベルリン、ミュンヘン、フランクフルトの三都市である（本来はウィーンも当然調査すべきであるが、本研究においては対象をドイツに絞る）。調査は主としてベルリン国立図書館およびバイエルン国立図書館で行い、資料としては当時のドイツで出版された音楽年鑑、新聞、音楽雑誌を用いる。

大戦終結後の一九二〇年代の重要な新潮流としては、大規模な交響曲の衰退と脱ナショナリズム（国際様式の模索）が挙げられるが、この基礎調査で着目するのは a. 世界大戦前に流行した合唱を伴う巨大なオーケストラ作品（マーラーの交響曲やシュトラウスの交響詩など）が、大戦中も継続して作曲されていたか否か b. 大戦前と比較してオーケストラ演奏会の上演頻度に増減があったかどうか c. 大戦中のプログラムに何らかのナシ

ヨナリズム的偏向が見られるかどうかの三点である。

4. 研究成果

本研究においては、戦争中の作曲家ならびに批評家の言説の中に、後の一九二〇年代の新潮流へとつながっていくような新理念の萌芽を見出し、さらには戦争の諸相とのその具体的な因果関係を見出すことを目的とした。研究の結果として、当時の有名な批評家パウル・ベッカー (Paul Bekker) が、戦争中の一九一六年に出版された *Das deutsche Musikleben* (ドイツの音楽生活) において、従来の演奏会制度が専らブルジョワ階級の独占物にすぎず、それは歴史的使命を終えつつあって、戦争が終わった後は全階級に開かれた新しい音楽演奏の機関を創出しなければならないと考えていたこと、ベッカーが夢見る新しい演奏会は、一種宗教的なものであって、ここにワーグナーの総合芸術の理念の幾分アナクロニスティックな残響が存在していることを、明らかにした。同時にここでは、明らかに従来の自律美学に基づく演奏会制度と受身で傾聴するのみの聴衆という、戦後アイスラーやヒンデミットやベッセラーが問題にすることになるロマン派／ブルジョワ文化批判が予告されていることも、分析された。さらに一九二〇年代にまず音楽批評家として活動を始めたアドルノにも、こうした発言がしばしば見られる。この種の言説のルーツを大戦中に出版された音楽書や音楽雑誌から析出し、それらを分析したことが、本研究の最大の実績である。また戦争中のドイツにおける演奏会状況ならびに演奏会プログラムの調査を行なったが、ドイツでは大戦中においても音楽家はあまり兵役にとられなかった。従って、戦争中であるにもかかわらず、相当活発な音楽活動が繰り広げられていた。その実態を、戦争中の音楽年鑑や音楽雑誌を主たる資料として、当時一体どれくらいの頻度で、どんなプログラムによる演奏会が催されていたかについて、調査分析を行なった。

社会基盤が根底から揺さぶられる時、芸術の相貌もまた大きく変化せざるをえない。「非常時」にあって常に芸術は存亡の危機に立たされる。「歌舞音楽自粛」といった倫理的圧力、そして芸術を支える経済的基盤の脆弱化は、社会の中の音楽／芸術の存在の自明性を根本から揺さぶらずにはおかない。だが危機の中でこそ、音楽／芸術は自らの存立根拠を強く確認できることも、歴史が証明している。ただし社会的危機においては、音楽がもつ「人々を励ます／慰める」力と社会統合力が再認識されると同時に、それが動員体制の中に組み入れられる危険も増し、それに反発するアヴァンギャルドたちは逆に「社会参

加を拒否する芸術」へ突き進むという構図は、決して過去のものにはなっていない。

また第一次世界大戦がきっかけとなった、社会の中での音楽の立ち位置の劇的な変化を明らかに出来たことも、本研究の重要な成果である。第一次世界大戦に先立つ世紀転換期は、大都市の音楽生活がほぼ現代の形に整えられた時代である。人口急増に伴ってコンサートホールが次々に建てられ、例えば 1900 年のウィーンでは 1870 年の四倍もの演奏会が開かれるようになっていた。このように娯楽産業化された音楽生活は、第一次世界大戦によって根底から覆される。1914 年 8 月の戦争勃発当初、ドイツ／オーストリアでは予定されていた演奏会は全面的に中止になる。それは非常時にあつての「自粛」であり、演奏家の出兵による人員不足、そして鉄道網の遮断による演奏家の「流通」の停滞によるものであった。しかしながら翌 1915 年あたりから、ドイツ語圏のコンサートライフは目覚ましい復興を見せ始める。ただし戦前に戻ったのではない。むしろ人々は、非常時にあつてなお音楽が不可欠であることを強く意識し、生活の中の新しい音楽のありようを模索し始めたのである。

かくして第一次世界大戦中に、ドイツやオーストリアで盛んに催されるようになったのが、慈善演奏会である。戦争未亡人や戦争孤児や負傷兵を援助する目的で、さまざまな形態の無料コンサートが提供されるようになった。人々が音楽に「飢えていた」こともあり、有名演奏家が出演したことも手伝って、これらの慈善演奏会 (ビヤホールで行なわれることもあった) は爆発的な人気を博することになる。これらは「高級音楽」をより広汎な聴衆へ開放する契機となり、一九二〇年代になって急増する労働者コンサートの先駆ともなった。しかしながら看過してはならないのは、慈善演奏会の多くは実は内務省によって主導されており、戦争プロパガンダを目的としていたという事実である。つまり後のナチス・ドイツによる文化政策の雛形も、第一次世界大戦にあったのである。また慈善演奏会には多額の助成金が国家から供出されたこともあって、有力マネージメント会社に巨額の利益をもたらすことにもなった。皮肉なことに戦時中の国家による音楽の管理は、音楽の産業化をさらに加速させた側面もあったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 5 件)

①岡田暁生、芸術はなおも『頑張る物語』を語り得るか、季刊アルテス1号 3.11と音楽、査読有、2011、pp.34-41 ページ

②岡田暁生、音楽と政治参加 — パウル・ベッカーと第一次大戦、政治的リーダーと文化、筒井清忠編、千倉書房、査読有、2011、pp. 291-309

③岡田暁生、郷愁の啓蒙 — アドルノの交響曲/室内楽論について、啓蒙の運命、富永茂樹編、名古屋大学出版局、査読有、2011、pp.404-431

④岡田暁生、前近代と超近代のはざままで ヴィルトゥオーソ現象と19世紀、ユリイカ 特集現代ピアニスト列伝、査読有、4月号、2010、pp.97-102

⑤岡田暁生、ロマン派の呪縛と現代音楽の袋小路、大航海 70号 現代芸術徹底批判、査読有、2009、pp.58-79
〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計3件)

①岡田暁生、小学館、楽都ウィーンの光と影、2012、258

②岡田暁生、人文書院、「クラシック音楽」はいつ終わったか — 音楽史における第一次世界大戦の前と後、2010、234

③岡田暁生、中公新書、音楽の聴き方、2009、237

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田暁生 (OKADA AKEO)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：70243136

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

